

---

# 心を読むのは禁止です

恋時雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

心を読むのは禁止です

### 【Zマーク】

Z0399M

### 【作者名】

恋時雨

### 【あらすじ】

杏里が引っ越してきたマンションには心を勝手に読む男子がいて！？しかもその人とはお隣さんで・・・？

「五五二」

私は今日、この街に住むことになった。一人暮らしだ。

引っ越してきて初日から・・知らない人から告白を受けている  
もう嫌だ・・

毎回の行為

「好哉です！」お抱きでござれ。」

「一回忽かしました!!」

とか。

もう『最悪』

私はそんな一目みただけで告白とか絶対無理っ！ 皆彦たの、私は性格も大切だと思う。

その人の事知らないのになんで告白なんか

後編

「えっ、いえ……気にしないで下さい……」

卷之三

・だから一教えろつ

私は一瞬その人の笑顔が怖いと思った。  
ゾッとするようなそんな笑顔だった。

でも。

顔は悪くない・・

黒髪で右の耳にピアスをしていて・・・凄くカッ「良かつた。服装も

悪くはない・・・

私と同じ20歳ぐらいかなー・・・

「黒髪で右耳にピアスをしていて、凄くカッコイイ。服装も悪くない。私と同じ20歳ぐらいかなー・・・って思つたよな?ふははははー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

なんだこの人。

氣味が悪い。

「なんなんですか?貴方は!人の心勝手に読まないで下せ!ー!ー!

「君面白いーそだ。俺は 黒沢 翼 よみしきくなー

「くわさわつばさ・・? (普通の名前・・?だな)

「だよなー。普通の名前だろ?笑

またよんだ。

「読まないでくださいよー恥ずかしいじゃないですか・・・

「なーんか変なことでも考へてるのか?恥ずかしいよいつな。

「考えません!ーーーあと、私の名前は 平野 杏里

「杏里ねーまたなー」

彼はそう言つて優しく微笑んだ。  
ガチャツ。

どうやらあの人は隣の部屋らしい・・・

【これが私

とあの人との出会いだった】

## 「ゲームの始まり」【2】

あの出会いから一月たった  
あの人とはなんの出来事もない  
いつものように

毎日毎日耕される田々。

告白されるばかりで

恋愛心理のじやなによ・・

「ああ……お、恋愛が叶へれ——！」

私は部屋のベランダから大声で叫んだ。

「うるさいんだけど・・静かにしろつ 笑近所迷惑」とにつゝりと笑った。

「ああ・・すいませーん」

「いやー別に俺はいいんだけどさー。つかーなに恋愛をしてくれー  
つて・・」

「いえーほー・・・いわてんあります・・・」

「なになにつ！？」

笑顔が眩しかった

「へー。そーこう」と・・じゅあそー俺とすき合つ・・・・俺と恋すらこころ

なにを言つてるんだこの人……………  
バカか！？バカなのか！……………?  
？？？

「へ？どういふことですか？」

「んーとまあ も・・ゲー・ムだよ。本氣になつたら負けって言ひ。まあ。ためしに俺と杏里が付き合つだろー。でいろいろやつて～最後に本氣で好きになつたら負け。ま・・遊び半分で付き合つんだよ。俺ら家隣同士だし誰にも邪魔されないだろ？」

「いやーその・・そーですけど・・遊び半分で付き合いたくないっていうか。私はふつーに好きになつてーふつーに告白してふつーにいろいろして・・つていうのがいいんですよー。」

「へーそんなもんかねー恋なんてそんなにつま無いかないもんなんだよ？実際。君の夢のようにはならねーの。」

なんなんだ本当にこの人。

恋をなめてるよ・・私は夢を見てますよー！

別にいいじゃないですか！ーほつとこてくれつてかんじだよー！

「でもやっぱり私は・・そういうのは嫌ですか？」

「そー・・君つてつまんない女だね」笑顔で言われた。

プチッ

私の中のなにかがキレた。

「なんなんですか？本当。てめえなさつきから聞いてるとーーわか

つたよーー私はつまんない女じゃなこいつーとをわからしてやるか  
ーーー。ナニがう二三九ナニハ二二二

あーも―――ひなつたひすかくせだあああああああ

11

「ふはははっ。わかつたよ。絶対本気にさせるから」

## こうして私達のゲー

ムが始まつた・・。

「想い」【3】（前書き）

ちょっとグダグダだつたらすいません・・

## 「想い」【3】

ゲームが始まって一日目。

「杏里ー」

隣の部屋から声がする。

私は窓から

「なんですか？」

と問いかけた。

「今日ヤー。どつかいかねーかあ？俺ら恋人同士だしさー」

「仮ですかねー。いいですよ。別に今日は暇ですし。」

「それじゃあ、今日の一時なー前の公園で」

「わかりましたー」

前の公園つて・・家隣同士なのになぜ前の公園に集合なんだろ？・・  
おかしな人だな・・

（一時）

到着。

黒沢さんが来ていた。

「待ちました？」

「ううん。別につ。）にしても・・可愛いな。杏里。本気の方じや  
ねーけど）」

杏里は今日、フリフリのワンピースを着ていて、リボンがついてい  
て・・とにかく可愛いです。

「まつこ」「一也」

そういうと手をつないだ。

「あのー黒沢さん……どう行くんですか？」

「んどーショッピング？ それと。杏里俺の事呼び捨てでよんでもいいよ」

「へつ・・?いやいや…いいですよ…私は黒沢さんで」

「なんでも？俺達同じ年だし。呼び捨てのがいいって。翼でいい

「えと…その男の人を呼び捨てとか…したことなくて…ですね／＼」

「早くよべよ

まだだ…笑顔が怖い…

「つば…つ／＼翼？／＼／＼

「（可愛すぎなんだけど…）それでいいんだよ」一也「ココ。

まだ顔が赤い杏里だった

「なあ～杏里 行きたいといふとかないか？」  
私達は今お店の中でお茶中。

「そーですね～お願いなんですが～あそこによつてください

杏里の指差す方には。

可愛いロリータ系のぬいぐるみが…

「いいよ」

喜んで翼は答えた。

「ありがとうございます。」

「アアアア！！！」

「可愛い～」

ワイワイはしゃぐ杏里。

それはまるで子供のよう。

「（なんか可愛いな／＼／＼って何思つてんだ？俺・・・）」

「あーもー可愛いよお・・・」

「杏里ってぬごぐるみ好きなのか？」

「えつ・・・あーうん！大好きだヨー！恥ずかしいけどw  
あれ？杏里・・敬語使つてないな・・・」

「へー。じゃあ買つてやるよ」

「いいの？ つて悪いからこいよ

「いいんだよ？ てかもつ買つちやつたし。」

「ありがと・・・」

『帰り』

「んじゃあ帰るかあ」

「はー。今日はありがと「ハジメ」ます。ぬいぐるみまで買つてくれて」

「いいって つか、杏里敬語やめてほしんだけど」

「こや・・でも」

「恋人だしよ。いいだろ?これだけは聞いてくれよ」

「わうですね・・ぬいぐるみも買つてくれたし・・いいですよ。別に」

「あらがとな」――

「(あれ・・なんかカツコイイ・・)」

「あー今カツコイイとか思つたろ・・」

また・・この人は・・人の心を・・つ――!!!!!!  
どうする・・?殺るか?今ここで殺つておくか?  
ちょっと殺意が芽生えた杏里だった。

家へ到着。

「じゃあな~今日は楽しかった

「あ・・うん。私も」

「はは。また行こうなあ？」

「うん」「ニッコリ

それは彼女が初めて俺に見せた笑顔だった。それはとても可愛い。  
天使のような笑顔だつた。

俺は一瞬・・素敵なキモチになつた。それと・・同時に俺の体が勝  
手に動いた。

氣づくと彼女の唇と俺の唇がかさなつていた・・

「くつ？／＼ええ？おつ？あ？えつえ？ふあ？／＼  
おどおどしていた彼女はとても可愛かった。

「わりい／＼俺はそのつ！－好きでやつたんじゃねーから／＼  
なんか急に体が動いて！－だから！したくてやつたんじゃねーぞ／＼  
／＼

「くつ・・くつうん」

一人の顔が一気に赤くなつた。

そして部屋に戻りベッドの中

（翼）

「なにやつてんだよ。俺、好きじゃねーのにキスなんて・・どうか  
してる」

そして眠りについた・

（杏里は）

「キス・・初めてだ。しかも翼と・・はあ・・氣まずいな・・畠田」  
そんな事を考えながら寝た。

（朝）

「やばい！…畠田は『』だしー…」

急いで外に出た。

それと同時に隣のドアがあいた。

最悪だ・・タイミング悪すぎ・・  
杏里は心の中でせつ四んだ。

「あ・・杏里。」

「翼・・」

静かになつた。

一人の間にいやな空気がながれる・・

「そだ。私『』せなきやだめだから」

「ああ・・昨日は『』めんな／＼／

「いじよ・・別に、嫌じやなかつたし」「  
私はなにを言つてゐんだろ って思った。

「じゃあね」

（ぎゅつ

翼が後ろから抱きついてきた。

「はつ？」

私は一瞬なにがおきたのかわからなかつたー・・。

「『めん・・少しだけ・・我慢して』

「なつ？どうしたの？本気になつたあ～？」  
遊び半分でそう言った。

「わからんねーよ・・なんかキスしたくなつたり・・抱きしめたくな  
るんだよ・・／＼俺もわからんねーんだよ／＼」  
翼は少し照れ、顔を隠ししゃがみこんだ

「翼・・恋した事ないの？」

「あるよ・・でもなんか・・今までとは違う感じだし」

「クスクスク」少し軽く笑った。

「なんだよ／＼／＼

「だつてさー。翼面白いんだもん」

私は翼と回じぐらこにしゃがみこんだ

「ねえ。翼つてモテるでしょ」

「そんなことねーよ・・つかなんでそんな話になるんだよつ

「まあまあ わ バレンタイン何個貰つた？告白は何回やれた？」

「バレンタインは500個ぐらい。告白は1000回ぐらい。杏里  
は？」

「モテるじゃん・・・私はー。チヨコが300個で告白が3000だよ」

「すげーな・・・さすが。チヨコ普通はあげるほーじゃねーの?」

「そーだよ?」

「(笑 それよりゴミ)

「・・・・・・・・・・・・あー。もー間に合わない・・・」

「ははっ・・・わり w」

「あのー笑いながら言われても全然・・・うんつ!いいよ!・・・気にしないで!! とか言えねーし・・・・・・だから許さん!!」

「ええー w w w w」

「はははっ」

「人が笑い合っているところ」。

「杏里ー! ! !」

向こうから男の人来た。

「あつ! 隼人! ! !」

隼人とは・・? 一体誰なのだろうか・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0399m/>

---

心を読むのは禁止です

2010年10月28日08時36分発行